

第二話 佐渡島のセセナゲ

安田 実

一、「日本の下水道」の歴史へのささやかな疑問

「日本の下水道」（昭和62年、建設省都市局下水道部監修）の冒頭に下水道の歴史が述べてある。「わが国における下水道の歴史」と「外国における下水道の歴史」がコンパクトにわかりやすく書いてある。しかし、ちょっとおかしい。わが国における下水道の歴史は、明治時代からしか書かれていないのだ。

下水は人間が存在する限り人間と一体不可分に存在するものである。だとすれば、下水道をいかなるものと考えるかもよるけれども、その歴史は明治時代よりもずっとずっと以前に遡るはずではないだろうか。

同書の「外国における下水道の歴史」の項では次のように記述されている。

——下水道の起源は遠くインダス文明の栄えた都市にさかのぼる。紀元前二〇〇〇年頃、モヘンジョ・ダロは、井戸、浴

室、便所等の設備を持った都市。各戸からの排水は、レンガ作りの下水道や浸み込み式の底を抜いた大甕による汚水槽を経て、大通りの本下水道へ導かれた。本下水道には煉瓦づくりのマンホールが設けられ、定期的に清掃がなされた。また、下水渠の途中には沈殿池が設けられており、最初の下水処理設備であるといわれている。——

わが国の下水道だって、紀元前二〇〇〇年とは言わないまでも明治時代よりもっと以前からあったとおおかしくないのでないだろうか。日本にも、江戸時代、あるいは、それ以前から人々の密集した都市があったのだから。

二、治水事業のはじまり

下水道ではないが、水と人との係りという点から興味深いのは治水事業の始まりであろう。いまさら言うまでもなく、わが国においては都市農村を問わずその殆んどが存在の基盤を洪水の氾濫区域である沖積平野に置いている。わが国の都

市の発展は、洪水との闘いである治水の歴史と裏腹の関係にある。

「日本の河川」(昭和五十七年、建設省編)によれば、わが国の治水事業のはじまりについて次のように述べている。

——記録に残されている治水事業の最も古いものは、四世紀に仁徳天皇が難波に遷都し、淀川下流において難波の堀江を開きくするとともに、枚方付近に茨田堤を修築し、淀川左岸一帯の平野の氾濫を防止したことである。——

この難波の堀江の開削と茨田堤の修築については「淀川百年史」(一九七四年、近畿地方建設局)に詳しいが、その中に日本書紀仁徳天皇十一年の項の引用があるのでその部分を引用する。

——十一年の夏四月、戊寅の朔にして甲午の日、群臣に詔したまひしく「今朕、この国を視るに、郊沢曠く遠くして田圃少乏し。また河の水横に逝れて流末駛からず。いささか霖雨に遥へば、海潮逆上りて、巷里船に乗り、道路また溼なり。故、群臣共に視て、横の源を決りて海に通し、逆ふる流を塞ぎて田宅を全くせよ」とのたまひき。冬十月、宮の北の郊原を掘りて、南の水を引きて西の海に入れき。因りて、その水を號けて堀江と曰ふ。又、北の河の滂を防がんとして、茨田の堤を築きき。——

国土の経営に不可欠の治水であるが、下水道とて同じこと

であろう。

三、本格的下水道

ところで、下水道とは一体どういふものを言うのであろうか。私は、「下水道」とは、下水を排除又は処理するすべての施設と考えている。そして、「下水」とは、人間活動により生ずるすべての排水及び人間活動の影響を受けて汚濁した雨水と考えている。もちろん、前者の排水には、住居地域から排除されるべき雨水も含まれる。

従って、およそ人間が生活しているところであれば必ず下水道が存在することになる。とすれば、下水道の歴史はモンジョ・ダロどころの古さではない。

そこで、「下水道」の範囲を少々せばめて、ここでは「下水道」を本格的下水道(あえて近代的下水道とは言わない)と考えることにする。私は、この本格的下水道を「下水を排除かつ処理するための系統的システム」と考えてみたい。キーポイントは排除と処理と系統的である。

こう考えてみると、先のモヘンジョ・ダロの下水道はまさに本格的下水道であり、下水道の歴史を語るにふさわしいものであることがうなずける。

それでは、日本の本格的下水道はやはり明治以降なのであろうか。このささやかな疑問に対する答えが日本海の荒海に横たわる佐渡島にあった。

四、佐渡相川町

佐渡島は新潟市北西約四五km沖合にある面積八五七km²の日本海最大の島である。天正一年（一五七三年）から慶長三年（一五九八年）までは、上杉氏の支配下にあったが、江戸時代には徳川幕府の直轄領となり佐渡奉行が相川に置かれた。

佐渡島では、平安時代末期から砂金が知られていたが、慶長六年（一六〇一年）頃、金銀の鉱山が開鉱された。

江戸幕府はその経営に力を注ぎ、石見大森銀山の経営にあたっていた大久保長安を銀山奉行に任命、各地から山師、採鉱夫を招いて大規模な採掘を始めた。

その結果、佐渡鉱山の中心地相川は、大森、生野をしのぐ鉱山町に発展し、全盛期の元和年間（一六一四年〜一六二五年）には人口一〇万余の密集した都市を形成するに至った。この様な密集した都市で排水対策が為されないはずがない。保健や医療の技術が未熟であった江戸時代ならなおさらのことであろう。

五、セセナゲ

相川の町には「セセナゲ」と呼ばれる下水道があった。このセセナゲというのは、家々の排水を一旦沈澱させた後、上澄みの水だけを家外の排水溝に排水するシステムで、江戸時代、相川の町には縦横にこの排水溝が整備されていたのである。

このセセナゲは、現在の下水道の様に下水を集中処理し集中放流するものではないし、排水路も暗渠ではない。セセナゲは下水を分散処理し分散放流する開渠のシステムである。

しかし、排水溝は系統的に整備されており、下水道の基本機能である排除と処理を兼ね備えた本格的下水道と言えるものであった。セセナゲの下水処理は沈澱処理のみであるが、モヘンジョ・ダロの下水道でもこの点に変わりはない。

佐渡島のセセナゲは、日本の下水道の歴史が明治以前の江戸初期にはすでに始まっていたことを物語っている。そして、その始まりは佐渡相川の成立よりもっと以前にさかのぼるに違いない。日本の下水道の歴史を考えると、セセナゲの歴史についても調べてみる価値があるのではないだろうか。

なお、この佐渡島のセセナゲについては、テム研究所編「図説佐渡金山」（一九八五年、河出書房新社）に詳しいので、興味のある方はそれを参照されるのが良いと思う。

六、追伸

先日、たまたま佐渡島へ行く機会を得たので、相川で宿をとった。佐渡自慢の歯ごたえのある新鮮な刺身をいただきたいが、宿の陽気なおかみさんにセセナゲのことを聞いてみた。四十歳ぐらいのおかみさん、セセナゲのことを知ってはいしたが、沈澱槽は今は無いらぬ。何でもおばあさんの家にそんなものがあったが、改築する際に取り払われたそうだ。何故

取り扱ったのかと問うたところ、「良くわからないが、どうも邪魔になってきたから」らしい。セセナゲも今は無し、ということだ。近年の生活様式の変化の結果であらうか。

ところで、セセナゲという言葉、遅まきながら辞書をひいてみた。広辞林にセセナゲという言葉はなかったが、「せせなぎ」という言葉があった。「溝」と書く。意味は次のとおりだ。——「せせらぎ」の音転。○浅瀬の水の流れているところ。○下水、排水のために掘ったみぞ。——

セセナゲの歴史、相当に古そうだ。

(本稿は、昭和六二年三月二五日第一回下水文化研究会例会における発表の内容を再稿したものである。)

討論

稲場 越前大野でも相川と同じで、大きな排水のますがあり、粗大な汚濁物を沈殿させたりえ排水路に出していた。太閤下水などいわゆる処理は排水源で行っていたのではないか。

安田 相川は、系統的な排水路を持っていた。江戸時代の城下町は、案外系統的な排水を備えていた。

中村 「下水文化を考える」(日本下水道協会刊)の中に水琴窟が出てこないのが残念。

稲場 下水道と水琴窟は、直接関係があるか疑問。下水道の原点は、明治以前にあったことはたしか。当時は、処理機能

が個人の段階まで分散していた。現在と正反対だ。現在、穂高町でやっている雑排水処理のシステムが当時のものに似ている。生活雑排水沈殿槽が九十パーセント以上普及し、月一回沈殿物を車で収集し、処理場でコンポストに加工している。穂高のシステムは一応成功していると思う。

(昭和六二年三月二五日、日本下水道事業団霊南坂分室にて)

著者の現職・前職

現在、建設省中部地方建設局木曾川上流工事事務所調査課長。前建設省都市局下水道部流域下水道課計画係長。